

## 海外語学研修とLL授業にみる英語聴解力の変化

清 瀬 健

## An Intensive English Program Abroad and LL Classes in a Junior College: Effects on Listening Comprehension

KEN KIYOSE

## Abstract

This paper reports the effects of a four-week intensive English program in the United States and one-year long LL classes in a junior college first year level on listening comprehension. Pre- and post-tests ( CELT Listening From A ) were administered to 208 students attending LL classes and 71 students participating in the program abroad.

The t-test score showed that the intensive program group made significant progress in listening comprehension despite its length of stay abroad. The LL group also showed significant progress. Further analysis of the findings of the study is discussed.

## 1. 序

英語教育の国際化が叫ばれて久しいが、そのうねりの中で、海外での短期語学研修を実施している学校は年を追って増加している。今日では中学生の海外語学研修参加もめずらしいものではなくなってきた。海外での語学研修に参加することは、生活・習慣の相違からくる物の考え方の違いなど、日本の教室には学べない言語の背景にある「文化」に生で接することができ貴重な体験となる。そして参加者がいใดく何より大きな期待は、外国語を現地で集中的に学ぶことによって得られる「外国語能力」の向上であろう。外国語の集中講座の効果については次のような調査・報告がなされている。

Gardner, Smythe, Brunet (1977) は62名

のフランス語5週間集中講座に参加したカナダ西オンタリオに住む高校生に対し、講座の前後における態度、動機、フランス語能力の変化をみる目的で調査を試みた。その結果、態度、動機の面では、語学集中講座に参加することによって、被験者のフランス語に対する自信、および学習動機が高まり、さらに学んだフランス語を実際に使用しようとする気持ちが高まったと報告している。また、フランス語の能力に関して「聴く」「話す」技能を高める効果があるという結果を得ている。

町田, 神山, 佐々木 (1983), (1985a), (1985b) は、前述の研究を基に海外での短期集中語学研修における学習者の態度、動機等の情意的要因と英語能力などの認知的要因の関係および変容を明らかにする目的で一連の調査を行い、

次のように報告している。被験者は日本人大学生(20~32名)で、イギリス、アメリカで行われた夏期語学研修(28~34日間)に参加した者である。この大学生に対し、語学研修をはさんで前と後で、外国語学習態度やエスノセントリズム等の項目を含む情意的要因に関するテストと、英語能力テスト(文法・語い、聴き取り、作文、読み)を行った。その結果、英語能力に関しては、聴き取り、作文、総合点のそれぞれで有意差が認められ、研修の効果が明らかにされた。また、情意的要因に関するテストのデータから、情意的要因が言語学習に部分的にはあるが影響を及ぼしていることも明らかにしている。

山根(1985)は1983年9月から1984年1月までの4ヶ月半にわたるカナダ留学に参加した短大生(43名)と非留学の短大生(38名)について英語聴解力の変化を調査した。その結果、留学を経験した学生の聴解力は留学前に比べ、聴

解力テストの平均点が34%上昇した( $P<0.001$ )と報告しており、非留学グループではその伸びが19%( $P<0.001$ )となり、留学グループの聴解力は平均点で約2倍の伸びを示したことを明らかにしている。

以上、語学研修講座に関する研究をいくつか紹介したが、本稿では、4週間の海外語学研修がおよぼす聴解力の変化について調査し、前述の調査報告を参考に新たな見解が得られるかどうか分析を試みる。合わせて、約1年間のLL授業での聴解力の伸びについても報告する。

## 2. 目的

- ① 北星学園女子短期大学英文学科1年生のLL授業開始から終了時までのおよそ1年間における英語聴解力変化を調査する。
- ② 4週間のアメリカ語学研修により、聴解力にどの程度変化が現れるかを調査し、合わせてこの語学研修の妥当性についても検

表1 語学研修中の1週間(1月1日~1月7日)のスケジュール

	1日(金)	2日(土)	3日(日)	4日(月)	5日(火)	6日(水)	7日(木)
9:00~ 10:30	元旦休み	授 業		授 業	ディズニーランドにて1日をすごす	授 業	授 業
10:45~ 12:00		授 業	日 曜 日	授 業		授 業	授 業
		昼 食		昼 食		昼 食	
1:00		。学園創立者スミス女史の墓に参るため、パサディナまでバスでかける。その帰りにローズボールパレードに使用されたフロートを見学	。ホストファミリーと過ごす自由な一日	。教室にてゲームをして遊ぶ		。ショッピングセンターで見学、買物	。サヨナラパーティーの準備
4:30~ 5:00							

討する。

### 3. 調査

#### 3.1 被験者

LL授業が必修になっている北星学園女子短期大学1年生(1987年4月入学)全員208名。海外語学研修プログラムに参加した学生はその内71名であった。

#### 3.2 背景

##### 3.2.1 海外語学研修プログラム

本学英文学科では1985年までに、米国において夏期約4週間の語学研修を10回実施してきた。1986年からは単位化を目的にその時期をクリスマス、正月をはさんでの4週間に移項した。学生が単位を取得するためには、出発の約3ヶ月前から行われる事前生活指導の授業に6~7回出席しなければならない。さらに課題図書を含む事前のレポート、帰国後のレポート等が課され現地での語学研修と合わせ、「海外事情・語学研修」というタイトルで単位(2単位)が与えられる。

1987年度はロスアンジェルス近郊の3つのコミュニティに別れ、ホームステイをしながら語学研修プログラムを消化した。学生はそれぞれのホストファミリーの家からコースセンターと呼ばれる教室にかよい授業を受けた。表-1は1987年度に行われた語学研修の1週間のスケジュールである。

語学研修での授業内容は各コミュニティのコースセンターごとで若干異っている。1つのコースセンターでの様子を述べてみると、午前中はスピーキングを中心に授業が行われた。教科書はアメリカの生活・習慣を題材にした中級上レベルのものを部分的に使用していた。1クラスの学生人数は23名で教師1名、アシスタント1名。教師は大学卒のアメリカ人男性で、特に英語教授法などの訓練を受けていないボランティアであった。普段は航空機製造会社のエンジニアをしており、アシスタントはその夫人であった。この教師及びアシスタントは、語学教育の専門的訓練を受けてはいないが外国人(特に日

本人)をそれまでに自宅に多数ホームステイさせており、平均的アメリカ人に比べ日本及び日本人についての知識は豊富で、学生の取りあつかいにも慣れていた。また、それぞれのホストファミリーに本学学生と同じ年令層の大学生、高校生が何名かおり、その内の数名が授業に参加して日米の学生生活の相違についておたがいに話し合いを行った日が1日あった。

授業の基本的な形式は、教師が最初のクラス全員にある事柄について説明し、そのあとで学生は4~6名のグループにわかれてそれぞれが、その内容に関して英語で話すよう指導された。学生どうしが話し合っている間、教師、アシスタントは各グループを回りながら学生が活発に話しをすることができるようにアドバイスをしていた。題材は主に新聞やテレビで話題になっているアメリカ国内の問題や、日米間に関わる問題等を取り上げて、グループの中で学生1人1人がみじかくても英語で自分の意見を述べるよう指導を行っていた。表-1にある午後のスケジュールのうち何日かは、リクリエーションを兼ねてそれまでに学生が学んできたことを、教室以外の場面で実際に試してみる機会にもなっていた。

##### 3.2.2 LLにおける聴解力指導

前述のようにLL授業は1年生の必修科目になっている。授業は通常の90分を2分割し、45分で週2回(2単位)通年で行った。授業の内容は前期、後期ともリスニングに重点をおいた練習を行った。1987年度の教科書は次のものを1部又は全部使用した。

1. Listen & Recall  
Franklin Bacheller Prentice-Hall
2. Stories for Reproduction  
L. A. Hill Oxford U. Press
3. Listening Contours  
Michael Rost Lingual House
4. Graded Listening Vol. 2 Seido

表2 ある1日のLL授業における時間配分

7~8分	宿題の答合せ(ディクテーション・要約)
10分	宿題の内容をシャドウイング
14~16分	ペアを組んで 英→日, 日→英
7~8分	フリートーキング
5分	宿題の録音
45分	

表-2は45分のLL授業で行ったある1日の内容を時間配分で示したものである。年間を通して全体の約1/3の時間は要約の練習にあてた。学生はみじかいまとまった英文のテープをnote-takingをしながら聴き、その内容の要点のみを日本語に出す。ディクテーションの練習も行ったが、それは主に宿題として課し次の授業の最初に答合わせを行った。内容は、教育、科学、ビジネス等の諸分野から題材を得た英文のミニレクチャーでテープの長さは約1~3分であった。ディクテーションでは、学生は書き取れるまでくりかえして聴くことができる。答合わせを行い内容を確認したあと、教室ではテープの英文のあとを追って声を出していく「シャドウイング」を口ならしを兼ねて行った。「シャドウイング」で口が滑らかになったあと、学生どうしでペアを組みセンテンスごとにテープを止めながら1人が英文を口頭で日本語に訳し、その日本語を相手のもう1人が聴いてまとも

の英語に訳し直す。この練習は半期をすぎたころから取り入れた。また、ペアワークのときは学生どうし自由に英語で話しをさせる時間を5~6分とった。

LL授業と同様、聴解力の向上に密接に関わっていると思われる会話の授業は通年で週1回(90分)、1年間の必修になっていた。

### 3.3 テスト及びテスト実施

#### 3.3.1 テスト

調査に用いられたテストは David P. Harris, Leslie A. Palmer 共著の CELT (Comprehensive English Language Test) From A (McGraw-Hill Book Company) である。CELT はリスニング、文法、語いの3部門から成っているが、今回の調査ではリスニング部門のみを使用した。リスニングテストは3つのパートから成っている。パートIは質問形式でその質問に対して適切な答えとなるものを選択肢から選ぶ(20問)。パートIIはステイメントを聴き、その内容と論理的に一致するものを選択肢から選ぶ(20問)。またパートIIIは、みじかい男女の会話を聴いたあと、その内容に関する質問がなされ、答えとして適切なものを選ぶようになっている(10問)。テストに要した時間は約40分であった。(付録のサンプル問題参照)

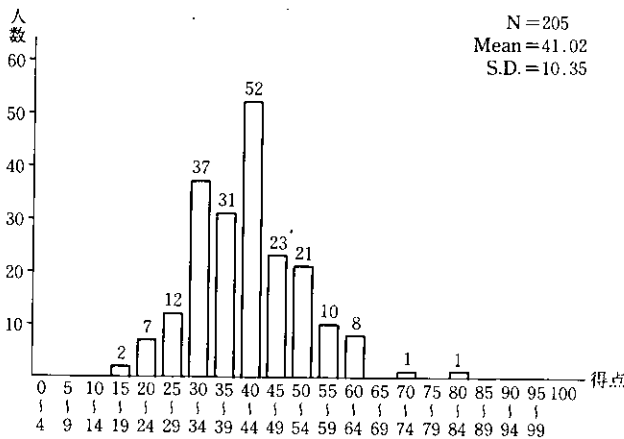


図1 1年生全員LL授業学年開始時における聴解力テスト得点度数分布

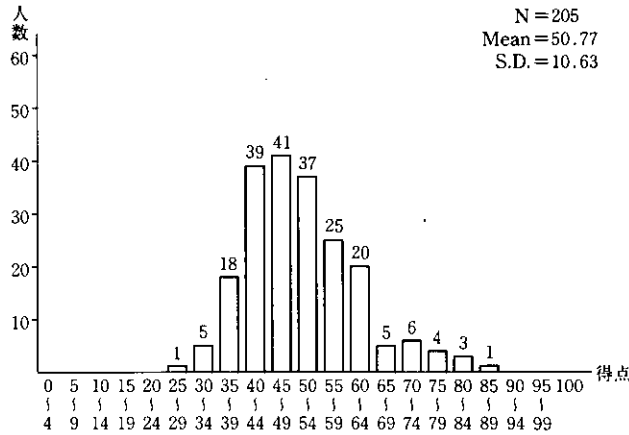


図2 1年生全員LL授業学年終了時における聴解力テスト得点度数分布

### 3. 3. 2 テスト実施

第1回目のテストはLL授業最初の日である1987年4月13日、1年生206名に対してLL教室にてヘッドフォンを使用して行った。テストについての注意はまず日本語で行い、さらにテープの中に含まれている英語での注意、指示を聴かせた。第2回目は授業最終日にあたる1987年12月14日、「事後」テストとして207名に対して行った<sup>1)</sup>。この「事後」テストの3日後に語学研修グループは米国にむけて出発した。したがって語学研修グループの「事前」テストはLL授業での「事後」テストがそれを兼ねた。帰国して約2週間後の1988年1月27日～29日の間に語学研修グループ71名<sup>2)</sup>に対して「事後」テストを行った<sup>3)</sup>。

## 4. 結果と考察

### 4. 1 LL授業約1年間における聴解力変化

図-1はLL授業開始時における聴解力得点度数分布である。グラフは最頻値が40～44点の級間で左にやや歪曲した分布を示しているものの、正規分布に近い形をなしている。左への歪曲は、最頻値の左側(低い点数)に人数が片寄っていることを示している。

図-2は約1年後のLL授業終了時における聴解力得点度数分布である。図-1と比較してみると、平均が41.02点から50.77点と伸び、最

頻値の級間が45～49点へと右へずれた(上昇した)ことがわかる。また図-1では最頻値の左側(低い点数)、すなわち39点以下の者が89名(全体の43%)であったが、図-2では39点以下の者は24名(全体の12%)に減少した。さらに、LL授業開始時の図-1には24点以下をとった者が9名いたが、終了時にはゼロになり聴解力の極端に低い者が減ったことが読みとれる。また図-2は、図-1と比較して最頻値をはさんで右側の級間(50点以上)に入る者が増え、高い得点を得た者が多くなったことを示している。図-1では65点以上の者がわずか2名(1%)であったが、図-2では19名(9%)へと著しく増加したことがわかる。

授業開始時と終了時の平均点の差に有意差があるかどうかを調べるためにt検定を行った。その結果、LL終了時には0.1%の有意水準で聴解力が伸びたと言える。

### 4. 2 海外語学研修前後における聴解力の変化

図-3、図-4は海外語学研修グループによる研修前と後の聴解力得点度数分布である。この語学研修グループがどの程度の聴解力をもった学生からなる集団なのかみてみると、図-2、図-3及びその範囲(1年生全員28～88に対し、研修グループ34～82)、標準偏差(10.63に対し10.12)、平均(50.77に対し51.06)等から、聴

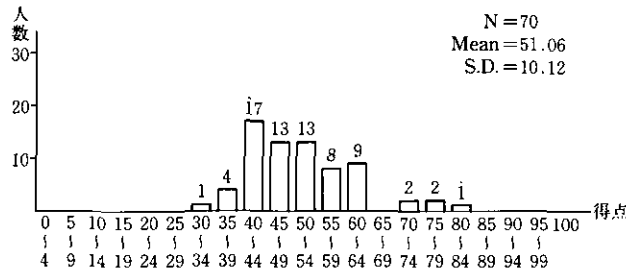


図3 海外語学研修グループにおける研修前の聴解力テスト得点度数分布

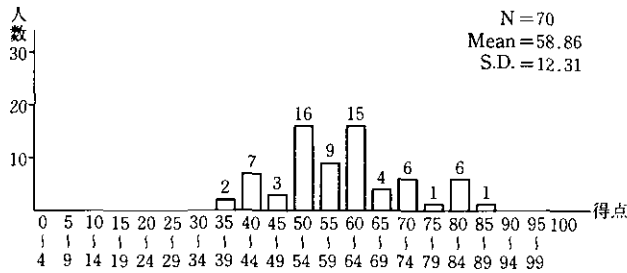


図4 海外語学研修グループにおける研修後の聴解力テスト得点度数分布

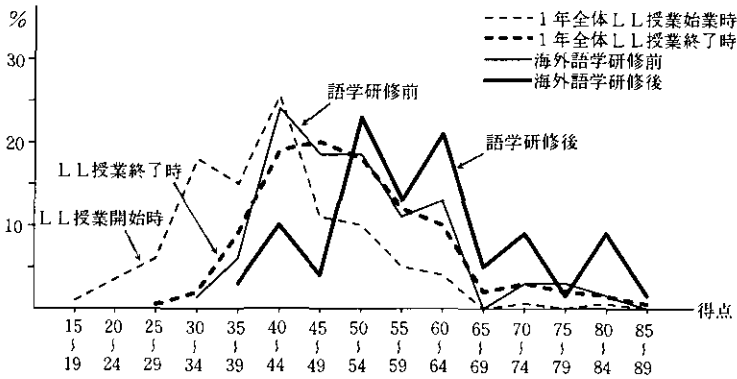


図5 パーセントによる度数分布

表3 L.L.授業及び海外語学研修の「事前」「事後」における統計数字のまとめ

	L.L. 授業						海外語学研修					
	N	平均点	標準偏差	分散	最高点	最低点	N	平均点	標準偏差	分散	最高点	最低点
事前	205	41.02	10.35	107.05	80	16	70	51.06	10.12	102.35	82	34
事後	205	50.77	10.63	112.99	88	28	70	58.86	12.31	151.49	86	36

解力の高い者と低い者がほぼまんべんなくまざり合って、聴解力の高い者や低い者だけが集まってできたグループでないことがわかる。

図-4では語学研修後、多くの者が図-3の時点より聴解力が上昇し、高い得点の級間へと移ったことがわかる。

語学研修前後の平均点についても検定を行ったところ、0.1%の有意水準で語学研修後の聴解力上昇が認められた。

図-5はそれぞれの級間にいる者をパーセン

トであらわしたものである。この図からも1年生全体のLL授業、語学研修ともに「事前」に比べ「事後」にはグラフが右に大きく移動し、得点が増加した者が増加したことがわかる。また表-3はLL授業開始時と終了時、海外語学研修の出発前と帰国後での統計数字をまとめたものである。

語学研修後、学生が到達した聴解力(平均58.86点)はCELT Examiner's Instruction and Technical Manualによると、米国中西部のあ

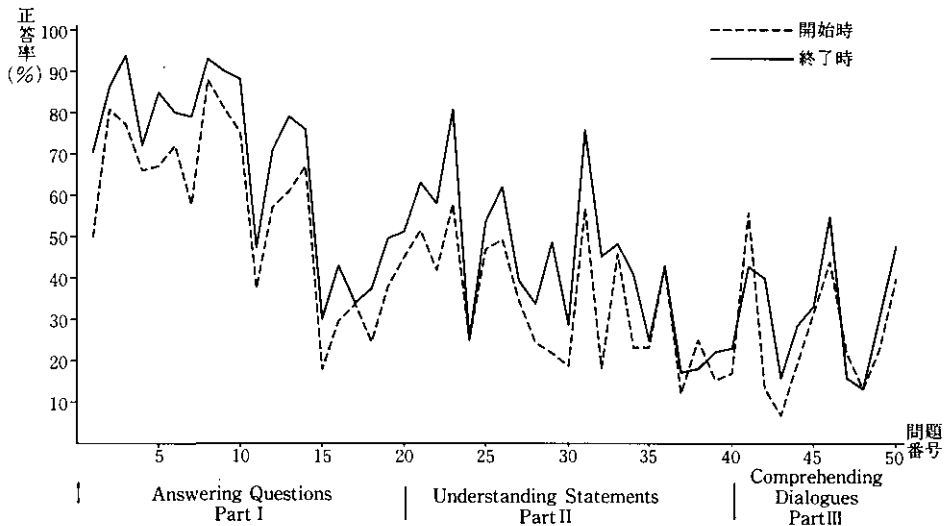


図6 LL授業開始時、終了時における正答率の推移

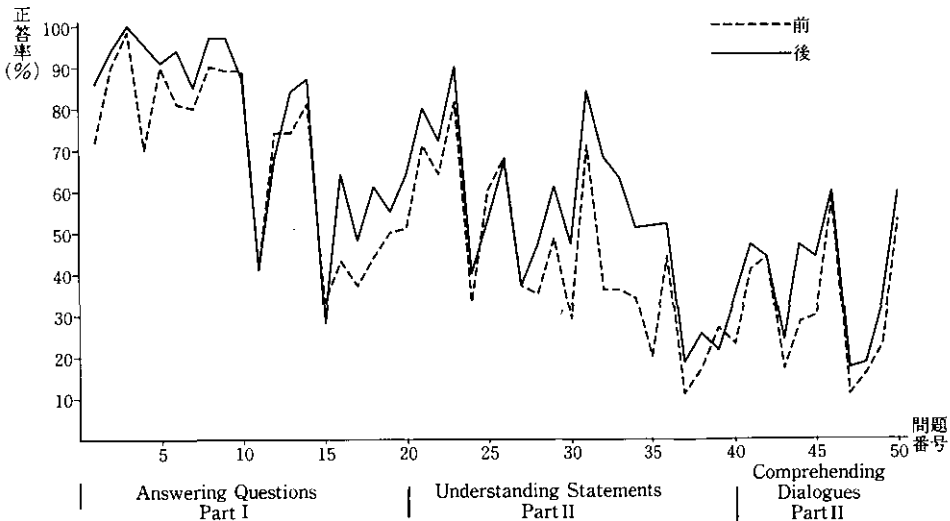


図7 海外語学研修前後における正答率の推移

表4 難易度ランクにおける事前・事後テストの正答率の伸び

難事前 易度 テスト ランク における	テ ス ト の パ ー ト	L L 授 業					海 外 語 学 研 修						
		問 題 数	事 前		事 後		平均 正答率 の伸び	問 題 数	事 前		事 後		平均 正答率 の伸び
			パ ー ト ご と の 正 答 率	平 均 正 答 率	パ ー ト ご と の 正 答 率	平 均 正 答 率			パ ー ト ご と の 正 答 率	平 均 正 答 率	パ ー ト ご と の 正 答 率	平 均 正 答 率	
高 難 度 ( 33.3% 正 答 率 以 下 )	I Questions	3	23.9		36.8		1	32.9		28.6			
	II Statements	11	20.2	20.3	29.8	29.3	+9.0%	7	22.9	22.8	30.4	30.4	+7.6%
	III Dialogues	7	18.9		25.2			6	21.0		30.7		
Sub Total		21					14						
中 難 度 ( 33.4% 正 答 率 以 上 66.7% 以 下 )	I Questions	9	49.6		61.8		6	44.8		56.0			
	II Statements	9	47.6	48.3	58.3	58.5	+10.2%	9	44.4	45.6	55.5	55.1	+9.5%
	III Dialogues	3	46.7		48.8			4	49.3		52.9		
Sub Total		21					19						
低 難 度 ( 66.8% 正 答 率 以 上 )	I Questions	8	76.2		87.0		13	82.5		87.9			
	II Statements	0	0	76.2	0	87.0	+10.8%	4	72.1	80.0	81.8	86.5	+6.5%
	III Dialogues	0	0		0			0	0		0		
Sub Total		8					17						
		50					50						



るコミュニティ・カレッジにおける上級英語コースに在籍する成人外国人グループ（平均59.76点）のそれに匹敵するものである。短大での授業約1年と海外で4週間の語学研修のみの結果であることを考えると、聴解力に関してはかなり高いレベルにまで到達したと言えよう。

#### 4.3 正答率の考察

図-6、図-7はLL授業、語学研修それぞれの「事前」「事後」テストにおける正答率の推移をグラフにまとめたものである。縦軸が正答率（%）、横軸は問題番号をあらわしている。図-6、図-7ともよく似たグラフになっているが、図-7の語学研修の方が図-6に比べて全般的に高い位置（正答率が高い）で折れ線グラフをえがいている。そして、両方の図とも平均的に右さがりのグラフになっており、LL授業、語学研修とも、パートI（Answering Questions）が一番易しく、パートII（Understanding Statements）がその次で、パートIII（Comprehending Dialogues）が一番むずかしかったことがわかる。

パートごとに図-6、図-7を見くらべると、図-6のパートIでは「事後」テストの正答率が「事前」のそれをすべての問題で上回った。しかし図-7では同じパートIのところ「事後」テストの正答率の方が「事前」に比べ20問中、3問に低い結果があらわれた。パートIIでは図-6、図-7とも20問中、3問づつ「事後」テストの正答率が「事前」のそれより低い現象がみられるが、3問とも双方に共通の問題ではなかった。パートIIIでは図-7で10問すべてに「事後」テストの正答率が「事前」のそれを上回った。

「事前」テストでむづかしかった、あるいは易しかった問題が、「事後」テストでは正答率にどのような変化が現れてるかをみてみた<sup>4)</sup>。表-4は「事前」テストの結果から、問題の難易度を3つのランク（正答率が33.3%以下＝高難度、正答率が33.4%－66.7%＝中難度、正答率が66.8%以上＝低難度）に別け、それぞれの平均正答率を計算し、「事後」テストでの平均正

答率と比較して難易度ランクごとの正答率の伸びをLL授業、語学研修それぞれにまとめたものである。また表-4の中では、各パートごとの正答率の推移も示した。

LL授業では、高難度における平均正答率の伸びが+9%で一番低く、中難度+10.2%、低難度+10.8%と、難度の低いやさしい問題ほど正答率の伸びが高かった。一方、語学研修では、LL授業とはちがったパターンを示した。中難度の平均正答率の伸びが+9.5%で一番高く、2番目に高いのは高難度の正答率で+7.6%、一番低かったのは低難度の+6.5%となり、易しい問題の正答率の伸びが、かならずしも一番高くなるとは限らない興味ある結果を示した。

#### 5. 結語

4週間の海外語学研修に参加した者は、「事前」「事後」英語聴解力テストにおいて有意差（ $P < 0.001$ ）が認められ、海外での語学集中訓練による効果が本稿のデータからも明らかにされた。したがって海外語学研修の実施については一応、その意義が認められたといえよう。

また、約1年間のLL授業においても「事前」「事後」の英語聴解力テストで有意差（ $P < 0.001$ ）が認められた。しかしながら、今回の調査では他の科目の影響を排除して聴解力の測定がなされたものでなく、LL授業が聴解力の伸びに関わっていることは本稿のデータから推測されるが、LLのみにそれが起因しているものではなかろう。調査方法などを検討しながら今後の研究課題として継続される必要があろう。

#### 注

- 1) 約1年を通して授業に出席していた者は全部で208名であったが、授業開始時に2名、終了時に1名欠席のためテストを受けることができなかった。したがってデータは「事前」「事後」両方のテストを受けた205名分を使用した。
- 2) 1名は語学研修前に病気でテストを受けられなかったため、データは70名分を使用した。
- 3) 海外研修グループは同一テストを3回受けたことになるので、学習効果による点数の影響がお

よぶ可能性もあるが、テストの実施にあたって、①問題用紙は毎回厳重にチェック、回収し、②正答を学生に知らせてない、③学生にはテストが学年の成績に直接影響しないことを告げてある、ことなどから学習効果の影響はかなり小さいものと考えられる。

- 4) 分析方法に関しては北大言語文化部助教授、熊取谷哲夫氏の助言を得た。(1988年4月より氏は広島大学教育学部に転任された。)

#### 参 考 文 献

- 浅野博, 他 (編) (1979), 『英語指導ハンドブック 4<評価編>』大修館
- Gardner, R. C., P. C. Smithe and G. R. Brunet (1977) .  
 "Intensive Second Language Study: Effects on Attitudes, Motivation and French Achievement " *Language Learning* 27:2
- 垣田直巳, 他 (1984) 『英語教育学モノグラフ・シリーズ 英語のリスニング』大修館
- Harris, D. P. (1986) . "CELT Examiner's Instructions and Technicl Manual" McGraw-Hill Book Company
- 町田喜義, 神山正人, 佐々木輝美 (1983). 「英語学習における情意的要因の役割に関する研究 (1)」『独協大学外国語教育研究』第2号  
 —(1985a) 「英語学習における情意的要因の役割に関する研究 (2)」  
 —(1985b) 「英語学習における情意的要因の役割に関する研究 (3)」  
 『独協大学外国語教育研究』第3号, 第4号
- 山根 繁 (1985) 「カナダ留学と英語力-聴解力の場合-」『帝塚山短期大学紀要』-人文・社会科学編-第22号
- 山内光哉 (1987) 『心理・教育のための統計法』サイエンス社

#### 付 録 ( サ ン プ ル 問 題 )

##### Part I: Answering Questions

Student will hear: "When are you going to New York? "

Student will read:

- (A) To visit my brother.
- (B) By plane.
- (C) Next Friday.
- (D) Yes, I am.

##### Part II: Understanding Statements

Student will hear: "George has just returned home from his vacation."

Student will read:

- (A) George is spending his vacation at home.
- (B) George has just finished his vacation.
- (C) George is just about to begin his vacation.
- (D) George has decided not to take a vacation.

##### Part III: Comprehending Dialogues

Student will hear:

(man) "Are you still planning to leave for New York next Monday? "

(woman) "I'm afraid not. My husband just found out he'll be in a meeting until late that afternoon, so we won't be able to get started until the following morning."

(3rd voice) On what day does the woman expect to leave for New York?"

Student will read:

- (A) Sunday
- (B) Monday
- (C) Tuseday
- (D) Wednesday